

校長通信

第5号 2019. 8. 20

SDGs ってどんなことをすればいいの？

【1】はじめに

前回の通信では、G20 の話から SDGs まで、話が広がりました。17 の目標の大枠だけ紹介し、この SDGs が決して開発途上国だけの話ではなく、先進国も含め全世界的な課題であることを紹介したと思います。そして、SDGs はとても身近な話題であることも伝えました。でも疑問もありますよね。

SDGs ってどんな取り組みがなされているの？そしてどんなことをすればいいの？

という事です。だから、今回の通信では、色々な SDGs の取り組みを紹介したいと思います。紹介する取り組みは、「未来を変える目標 SDGs アイデアブック」(一般社団法人 Think the Earth 紀伊国屋書店)に掲載されています。この本に掲載されている取り組みを紹介することにします。

【2】貧困をなくそう



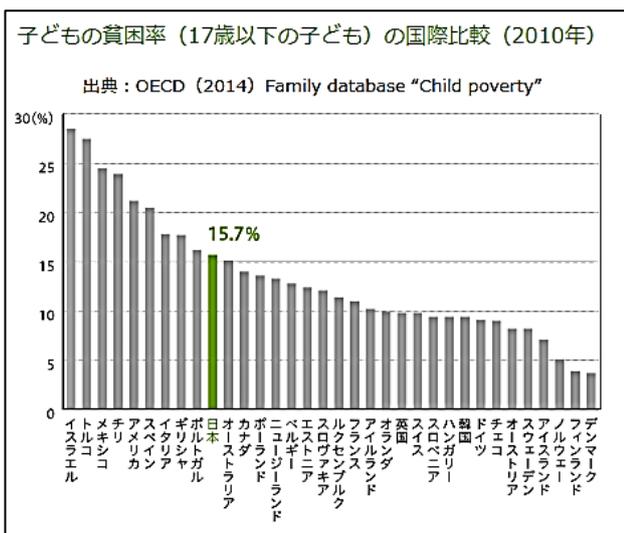
最初に紹介する取り組みは、「貧困をなくそう」という取り組みです。「エッ、日本で貧困？」と思う人も最近では、少なくなってきたのではないですか。「貧困」という概念にも二つの考え方があります。ひとつは、「絶対的貧困」。これは、生きていくうえで最低限のお金がない状態の貧困です。もうひとつは、「相対的貧困」という考え方です。これは、その国の平均的水準よりもかなり低い水準で生活している状態です。どのくらい低いかというと、国民の所得の中央値(数学で学びましたよね)の半分で生活する状態

を指します。日本では、7人に1人の子どもが相対的貧困の状態であると言われています。少し古いデータですが、2010年のOECD(知っていますか?OECD)の調査では、日本の相対的貧困率は、高い部類に入っています。

そこで、この貧困の問題に取り組んでいるNPOを紹介しましょう。それが、

おてらおやつクラブ

です。「おてらおやつクラブ」は、お寺にお供えされるさまざまな「お供え」を、仏さまからの「おさがり」として頂



戴し、子どもをサポートする支援団体です。Webpage を見てみると、全国で1,222寺院、441団体が参加しています。月に延約10,000人の子どもにおやつを配るといった活動をされています。お寺に納められるお供え物をおすそ分けとして、困っている子どもたちに配る、とてもシンプルな



取り組みだと思えます。通常、このようなお供え物は、地域の人たちや檀家さんにおすそ分けされるのが普通ですが、それを「困っている人」に配ることで、社会貢献につながっているのですね。おてらおやつクラブの URL はこちらです。

<https://otera-oyatsu.club/>

ですが、「おてらおやつクラブ」で検索してください。すぐ、ヒットしますよ。

【3】 飢餓をゼロに



次に紹介するのが、飢餓の問題です。今もアフリカやアジアの発展途上国では、満足に食事をとることができない子どもがたくさんいることは知っていますよね。「助けたい！でもどうやって？」「unicef に募金しよう」と思って、募金をした人もいるのでは？でも、募金をずっと継続している人はどれだけいるのでしょうか。そういう私も、街角で unicef の募金活動を見かけたら協力はするが、それ以外ではほとんどしません。情けないですが・・・。問題は、持続可能性。これが問題ですね。そこで紹介するのが、

TABLE FOR TWO

という取り組みです。このプログラムは、対象となる定食や食品を購入すると、1食につき 20 円の寄付金が、TABLE FOR TWO を通じて開発途上国の子どもの学校給食になります。20 円というのは、開発途上国の給食 1 食分の金額です。つまり、先進国で 1 食とるごとに開発途上国に 1 食が贈られるという仕組みです。また、この定食や食品もカロリーに気を使ったヘルシーなものとなっています。このプログラムに参加している企業・団体は、紹介しきれないぐらいたくさんあります。私も webpage をみてびっくりしました。

このプログラムに食堂が参加するには、

1. カロリーが 730kcal (680~800kcal) 程度*
2. 栄養バランスが適正
3. 野菜が多め

というガイドラインをクリアする必要があります。今宮高校の食堂で「TABLE FOR TWO」プログラムが実施できたら素晴らしいですよ。毎日の昼食で、飢餓から子どもたちを救うことができるのですから。少し定食の値段が上がっても、ヘルシーな定食が食べられて、飢餓対策に貢献できるなら、本気で考えますか？

TABLE FOR TWO の URL はこちらです。 <https://jp.tablefor2.org/>

【4】 すべての人に健康と福祉を



世界には、生まれた子どものうち、10人に1人が5歳の誕生日を迎えられない国がいくつもあります。途上国では、医療・健康の知識が十分に行き渡らず、本来なら予防や治療ができる病気で命を落とす場合が、多くあります。先進国でもタバコやお酒、薬物乱用で健康を害し、命にかかわるケースがあります。

そこで新しく誕生した赤ちゃんの命と健康を守る「日本発」の取り組みを紹介しましょう。それは、なんと第二次世界大戦終了直後から始まった

母子健康手帳

です。この日本の母子健康手帳制度が、世界の多くの国々で導入されています。右の写真は、世界の国々で発行されている母子健康手帳です。

ところで、みなさん、みなさんは自分が生まれたときに発行された母子健康手帳を見たことがありますか？私は、見たことがあります。母親から見せてもらいました。確か中学生の頃だと思えます。そのとき、母親は懐かしそうに



私を産んだ時の話を交えながら、どれだけ子育てが大変だったかの話をしてくれました。まだ、見たことが無い人は、一度見せてもらって、自分が生まれたときの話を聞かせてもらってはいかがですか？

母子健康手帳には、妊娠中の母体や胎児や出産時の母体の状況、子どもの成長度合いや予防接種の記録が書かれています。赤ちゃんが病気になって病院に行ったら、この手帳を見せることで医師は色々な情報を得ることができ、適切な治療ができることになるのです。素晴らしいアイデアですよね、母子健康手帳！日本の誇りです。

もう一つ、この「すべての人に健康と福祉を」の取り組みを紹介しましょう。それは、アフリカ東部のルワンダでの取り組みです。発展途上国では、お産の時に大出血、輸血が必要！でも血液を運ぼうにも道路は悪路ですぐには到着できない！というケースがよくあると言われます。そんな問題をハイテクで解決したのが、

Zipline

です。この **Zipline** とは、ドローンを使って血液を必要なところに届けるという取り組みです。



同じドローンを飛ばすなら、人の迷惑になる飛ばし方より、こんな使い方をしたいですよね。今では、ルワンダ以外の国でも活用され、先進国では、災害救助にも役立っているという事です。この **Zipline** の例は、テクノロジーをどのように使うかというかなり大きな問題を含んでいます。将来工学系に進みたい生徒の皆さんには、いつか目の前に突き付けられる課題ですよ。

Zipline の URL はこちらです。 <https://flyzipline.com/> アメリカに本拠地があるので、英文ですよ。

【5】質の高い教育をみんなに



教育の問題を取り上げるときに、いつも思い出するのが、ノーベル賞を受賞したマララ・ユスフザイさんです。イスラム過激派、タリバンが、パキスタンの女子校を破壊したことに對して、彼女は、抗議の声を上げていきます。私が詳しく紹介するまでもないですよ。彼女は、いまや知らない人が無いぐらいの人ですから。それにしても彼女の2013年7月の

国連でのスピーチは、鳥肌が立ちました。彼女の経験から絞り出された一語一語に、彼女の願いが込められていました。最後の部分だけ、紹介しましょう。



So let us wage, so let us wage a glorious struggle against illiteracy, poverty and terrorism, let us pick up our books and our pens, they are the most powerful weapons. One child, one teacher, one book and one pen can change the world. Education is the only solution. Education first

さて、ここで紹介する取り組みは、

みんなの学校プロジェクト

です。この取り組みは、国際協力機構 JICA によって始められた取り組みです。世界最貧国のひとつであるニジェールにおける低い就学率の問題。その要因となっている「教育に対する親の低い意識」を克服すべく、JICA によ

って始まった地方行政と地域住民（＝コミュニティ）による学校運営という支援モデルです。親の教育への意識に変化を与え、ニジェールの全国の小学校（14,000校）で行われるようになるという大革命をもたらしました。

学校に対する住民・親の理解不足を克服するために、住民参加による学校運営委員会を設置し、学校に対する理解促進を図っていましたが、多くの委員会は十分に機能していなかったらしいです。そのため、JICAは2004年1月から2007年7月まで「みんなの学校プロジェクト」を実施し、学校運営委員会を機能させる道筋を提示し、活動をサポートしてきました。その結果、住民の力のみで教室が建設されたり、不足教材を購入したりとさまざまな活動が運営委員会を中心に実施され、就学機会拡大のみならず教育の質も改善されるようになりました。



©JICA/Akio Iizuka

日本にも住民参加の学校制度があることをご存知ですか？コミュニティスクールと言います。このコミュニティスクールには、学校運営協議会というものが設置され、学校の先生と地域の住民が話し合って学校の運営を行います。大阪府では、私が住んでいる河内長野市ですべての小中学校がコミュニティスクールになっています。私が大学院で学んでいた平成27年度から28年度に、実際にコミュニティスクールの学校運営協議会に参加し、そこで話し合われていることを傍聴したことがあります。学校の様々な行事で先生の手が回らないことに地域の

保護者や住民の方が参加したり、学習指導について議論をしたり、通学路の危険について話をしたり、本当に住民の方々が学校の在り方について、真剣に話をされていました。

前回の通信で紹介した SHIHO さんの「ケニアの女子学生に布ナプキンを送ろう」という取り組みも、SDGs で考えると、このジャンルの取組になりますね。彼女がケニアのある高校を訪れたときに、ふと気が付いたのです、教室の椅子が空いていることに。最初は病気か何かで欠席しているのかと思っただけですが、校長先生に聞いてみると、「彼女は、生理になって登校できない」という事でした。これを聞いた SHIHO さんは、「日本では考えられないこと！」と思い、ケニアの女子学生が、生理が原因で学校を休まなくてもいいように、この取り組みを始めたという事です。



【6】最後に

一応、今回の通信の「最後に」を書きます。なぜ一応か？SDGsは17の目標を持っています。今回紹介したのは、まだ4つの分野です。そしてどちらかと言えば、発展途上国に多い課題です。17の分野のすべての取り組みを紹介したら、日本に住む私たちが「何をすべきか」もおぼろげながらわかってくるのではないかと思います。

今回紹介したプロジェクト、如何ですか？今でこそ、webpage まである大きなプロジェクトばかりですが、始まった当初は、そうではなかったでしょうね。誰か一人が思いたち、

「どう？こうやれば、世の中の役に立つよね、世界の人々に役立つよね」

と周囲の人に問いかけ、周囲の人も「そうだね、やってみようよ」と同調し、小さな動きが始まったと思うのです。私は、これを「50cm革命」と言ってよいと思います。この「50cm革命」は、自分の身の回りのことから、「こうすれば、みんなのためになる」という動きを起こす力です。これがとても大切だと思っています。私が、この通信を書いているのも、SDGsを取り上げるもの、■■高校に通う高校生みんなに、「50cm革命」を起こす力をつけてほしいからです。「私」中心ではなく「公」を意識した「50cm革命」、それが大事なのではないのでしょうか？ご意見・ご質問、待っています！